

## 「ダビデとゴリアト」(サムエル記上一七章一七〜五四節)

### 1 少年ダビデ

今日の箇所は、一つの戦いを物語るものとしては、聖書でも一番長いものの一つです。異例に長く読んでいただきましたが、それでも全部ではありません。しかしもっとも重要なことが含まれている箇所です。

長いだけでなく、おそらくもっとも有名な旧約聖書の物語の一つです。ダビデとゴリアト(文語、口語、ゴリアテ)、教会学校や日曜学校を経験したことのある人なら何回も聞いて、何回も紙芝居を見て、頭の中にすっかり入り込んでいる話だと思います。教会学校の先生をしたことのある人も同じではないでしょうか。

しかし今回ダビデの生涯をたどる学びの中で、改めてダビデとゴリアトの話を読みながら、少年ダビデが、大男のゴリアトを倒した、しかも「石投げ紐と石一つで」という、話としてはその通りなのですが、そういう出来事を、聖書は、サムエル記はどう見ていたのか、そのことがむしろ印象深く心に残り、今日はそれに焦点を合わせて話をするようになります。

一七章で私どもが目当たりしているのは、少年ダビデです。少年ダビデの話としては三つ目です。最初は一六章の前半、将来王になるべく選ばれた人としてダビデが預言者サムエルから油注ぎを受けるということでした。二つ目は一六章の後半、サウルを慰める人として王宮に召し入れられるダビデです。そして三つ目が今日の一七章、ペリシテ人との戦いで、ゴリアトを打ち倒したダビデです。今日の物語が述べているようにダビデは正規の兵士としてペリシテ人と対峙したわけではありません。律法には二〇歳以下は兵士になれないとあります(民数一・三)。つまり彼はまだ未成年なのです。

この三つの話は、テキストとしては互いに矛盾しているように見えるところもあります。だれもが気づくのは、サウル王はダビデをすでに知っているはずなのに、ゴリアトを倒して王のもとに連れて来られたダビデと、はじめて会うような会話をしている、そのような箇所です(一七・五八)。

しかし全体としては私どもはそれらを補い合っているものとして少年ダビデをイメージしてよいと思います。いずれにしても、私どもが忘れないようにしなければならぬのは、共通していること、一貫していることです。もっとも大事な共通していること、一貫していることは、ダビデが神に選ばれ、聖別された人(一六・一三)だということであり、「主が共におられる人」(一六・一八)だということであり、そのような者として主の戦いを戦う人(一七・四七)、神のみに助けを求め、神のみを支えとして戦った人だということです。それがダビデについての聖書の基本の見方です。

### 2 ダビデ、前線に

さてここに記されているダビデとゴリアトとの一騎打ち。それはペリシテ人とイスラエルの戦いの中で起こったことでした。

ペリシテ人とイスラエルの関わりは古く、聖書では遠くアブラハムの時代にまで遡ります（創世記二一・三四）。

両者の関係が緊張をはらんだものとなり、くり返し戦うようになるのは、士師の時代からです。この時代、海の民といわれ、地中海海岸沿いに、ガザ、アシドトなどの都市を築いていたペリシテ人は、肥沃な内陸部に支配を広げようとして、とくに収穫期をねらって侵攻してきたのです。

軍事面では、イスラエルよりも進んでいたらしく、青銅器から、さらに鉄を使い始めていたようです（上一三・一九以下）。今日の箇所でも、ゴリアトが持っていた太い槍の穂先は「鉄六〇〇シケル（六キロぐらい）」（七節）あったとあります。このゴリアトが隊列から出てきて、挑発し、わめいたとき、しかも、「四十日の間」、毎日二回、「朝な夕なやって来て、同じ所に立って」叫んだとき（一六節）、イスラエルは恐れに震えているほかなかったのです。

サウルとイスラエルの全軍は、このペリシテ人の言葉を聞いて恐れおののいた（一節）。

苦境の中にあつたイスラエル軍に、一人の少年ダビデが、人間的には偶然に、というより神の導きによつて加えられます。

この「エラの谷」でのペリシテ軍との戦いに、ダビデの家族からは、八人の息子のうち、エリアブ、アビナダブ、シャンマの年長の三人が駆り出されていましたが、先ほど申したように、二十歳になっていないダビデは参加していませんでした。彼は父の家において「サウルに仕えたり、ベツレヘムの父の羊を世話したり」（一五節）していたのです。

このダビデに父エッサイが使いを命じます。前線にいる兄たちに食料を届けることです。同時に千人隊長に付け届けをすることも忘れません。チーズ十個を渡し、兄たちの安否を確かめ、しるしをもらってくるようにと。ペリシテ人の戦いは長期にわたることがあり、銃後といったらいいのでしょうか、家族からの直接の支援を必要とされていたのです。

ダビデは父からの使いを、まるで待っていたかのように、「翌朝早く起き」（二〇節）勇んで戦線に赴きます。戦場についてからのダビデの動きも前のめりです。「持参したものを武具の番人に託すと、戦列の方へ走っていった」（二二節）とあります。長兄エリアブの言葉は、人間的な意味では、凶星なのです。「お前の思い上がり野心はわたしが知っている。お前がやって来たのは、戦いを見るためだろう」。末の弟ダビデが子供のとき、家でひそかに油注ぎを受けたことを長兄エリアブは鮮明に覚えていたはずです。

しかしこの少年ダビデの態度と言葉において明らかにされているのは、じつはこの戦いに対する神の姿勢なのです。サウル王の前に呼び出されて語った少年ダビデの言葉などに表れています。

あの男のことで、だれも気を落としてはなりません。僕しもべが行って、あのペリシテ人と戦いましょう。・・・わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣けものの一匹のようにしてみましよう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから（三二、三六節）。

今回改めてとくに興味深く感じたのは、出陣する直前のサウル王とのやりとりで王が自分の戦いの装束をダビデに着せようとしたけれども、慣れてないということでも、脱ぎ去ったところ（三八〜四〇節）。

おそらくふつうの牧童服を着て、ふだんから身につけている投石袋と、手には石投げ紐をもって出て行ったのでしようけれど、そうすると、あの有名なフィレンツェの旧市庁舎の前にあったミケランジェロの五メートルを超えるダビデ像、裸体のダビデ像はどうなるんでしょう。裸体のダビデ像にはその五〇年程前に有名なドナテッロという人の先駆作品があったようですが、人間の武器によってではなく、神の武器によって立つことは、いっさいを捨てること、非武装で立ち向かうということ、それは究極的に裸体でしか表現できないということでしょうか。昨晚はしばし思弁にふけたことでした。主の戦いがいま始まろうとしています。

### 3 勝利

ペリシテ人ゴリアトの側から提案されていた一騎打ち（八節）、イスラエルで行われないといけないけれど（サムエル下二・一二以下）、稀です。一般には他の地域、文化圏でよく行われていたようです。

ゴリアト対ダビデ、ヤーヤーと互いの前口上は長かったのですが、勝負は一瞬で決着します。

ペリシテ人は身構え、ダビデに近づいてきた。ダビデも急ぎ、ペリシテ人に立ち向かうため戦いの場に走った。ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。・・・（四八〜五〇節）。

ふだんから身につけている投石袋、「川岸から」とった「滑らかな」石が五つそこには入っていました。その一つをとって石投げ紐で放つと、ゴリアトの眉間みげんに命中したのです。剣をもつていなかったダビデは、ゴリアトの剣を抜き取って、とどめを刺し、首を切り落とします。

ダビデの勝利に終わったこの戦い、ダビデ自身はこれをどう考えていたのでしょうか。ダビデの言葉です。

お前は「ゴリアト」剣や槍や投げ槍でわたしに向かってくるが、わたしはお前が

挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。今日主はお前をわたしの手に引き渡される。・・・全地はイスラエルに神がいますことを認めるだろう。主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはしないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される(四五〜四七節)。

じつに力強い言葉です。これら力強い言葉によって、この戦いが何であるか、その意味も明らかにされています。

少年ダビデが大男ゴリアトを石ころ一つで倒した、私どもの記憶は、その程度になっています。しかし今日の箇所を読んで、ああそうだったと思ひ起こした言葉、それは何よりも、「この戦いは主のものだ」という言葉です。それゆえダビデはすでに勝利を確信しています。そしてその勝利によって起こることは何でしょうか。「全地はイスラエルに神がいますことを認める」こと。イスラエルの「生ける神」(二六、三六節)が本当に生ける神であることが明らかにされること。ダビデの戦いとは、そのことが証しされる戦いということなのです。

この戦いに勝利したダビデ、その姿は、私どもに、そのはるか二八代後に(マタイ一・一七)彼の子孫として誕生したイエス・キリストを思い起こさせます。神の子イエスもまた人となってゴリアトのような「民の罪」と、その贖いのために(ヘブライ二・一七)戦いつづけたのです。ダビデが勝利したように、イエスもまた勝利した。十字架とその復活によって、すべての人の罪を贖ったのです。

このイエスの勝利、罪と死に対する勝利、この勝利は疑問に付されることも、取り消されることもありません。この勝利は、聖霊によって私どものものとなります。私どもも勝利を生けることが許されます。

勝利を生けることの許される私どもにとって必要なこと、それはただ主なる神により頼むことです。じっさい神はダビデに、人間的にはまったくもって望みなきところで勝利をたまわったのです。ダビデとゴリアト、見た目では、人間としての力も、装備も、その差は歴然としていました。それでもダビデが王の装束の申し出を断ったことを私どもは見ました。それでもそれら人間的なものは、ダビデの敗北にはつながりませんでした。結局、彼は何もたずになら立ち向かったのです。主の戦いを、ただ主なる神を拠り所として戦ったのです。生ける神(二六、三六節)のみを支えとして、この方の現存のみを支えとして戦いに向かったのです。

この世にあつてどこにもゴリアトはいません。あります。それがどのような大きくとも、意気消沈せず、ため息をつかず、ダビデのように、生ける神のみを支えとして歩んでまいりましょう。

(二〇一九年七月七日)